

2006 年度博士学位論文（要旨）

「ほめの談話」に関する日韓対照研究

— 日・韓大学生の会話データを用いて —

指導：堀口純子教授

国際学研究科
環太平洋地域文化専攻
20442201

金 庚 芬
キンゴン

目 次

第1章 研究の動機と目的	7
1.1 研究の動機	7
1.2 研究の目的	2
1.3 各章の内容	3
第2章 研究の背景	5
2.1 対照研究	5
2.1.1 対照研究の二つの流れ	5
2.1.2 日本語における対照研究	8
2.1.3 日本語と韓国語の対照研究	9
2.2 談話の概念と談話研究の主要なアプローチ	13
2.2.1 本稿における「談話」	13
2.2.2 談話研究の主要なアプローチ	13
2.2.2.1 ディスコース分析	14
2.2.2.2 会話分析	14
2.2.2.3 コミュニケーションの民族誌	16
2.2.2.4 相互行為の社会言語学	17
2.3 ポライトネス理論	18
2.3.1 ポライトネスの概念	18
2.3.2 主要なポライトネス理論	20
2.3.2.1 Lakoff, R.	20
2.3.2.2 Leech, G.N.	21
2.3.2.3 Brown, P. & Levinson, S.C.	22
2.3.2.4 宇佐美まゆみ	26
2.3.2.5 Spencer-Oatey, H.	27
2.4 「ほめる」について	28
2.4.1 言語行動としての「ほめる」	28
2.4.2 発話行為としての「ほめる」	29
2.4.3 「ほめる」と他の言語行動との比較	31
2.4.4 「ほめる」とポライトネス	33
2.5 「ほめ」の定義	35
2.6 ほめに関する先行研究	38

2.6.1	英語	38
2.6.2	日本語	40
2.6.3	韓国語	44
2.6.4	日本語と韓国語の対照	45
2.7	研究課題	47
第3章	研究方法	50
3.1	会話の種類	50
3.2	データ収集	51
3.2.1	会話協力者	52
3.2.2	データ収集の手順	52
3.2.3	フォローアップ・アンケート	52
3.3	談話データの文字化	53
3.3.1	談話を文字化するための原則	53
3.3.2	トランスクリプトの空間的配置	54
3.3.3	トランスクリプトのカテゴリの種類の種類と記述の仕方	57
3.4	トランスクリプト・システムに関する先行研究	58
3.4.1	英語	59
3.4.2	日本語	62
3.4.3	韓国語	66
3.5	本研究におけるデータの整備	68
3.5.1	会話の文字化	68
3.5.1.1	発話文と改行の原則	68
3.5.1.2	表記	70
3.5.1.2.1	日本語の表記	70
3.5.1.2.2	韓国語の表記	72
3.5.1.3	文字化記号	79
3.5.1.4	文字化の信頼性	81
3.5.2	データ分析	82
3.5.2.1	コーディング	82
3.5.2.2	コーディングの信頼性	84
3.5.2.3	分析項目	84

第4章 基礎データ	86
4.1 ほめの談話	86
4.2 全ほめの談話、発話文、ほめ・返答の数	87
4.3 会話者一組、一つの「ほめの談話」における平均	89
4.4 直接協力者とその会話相手別に見る発話文数	90
4.5 全協力者の発話文とほめ・返答の数	92
4.5.1 日本語男性	92
4.5.2 日本語女性	95
4.5.3 韓国語男性	97
4.5.4 韓国語女性	100
4.6 フォローアップ・アンケート	102
4.6.1 全会話協力者 120 名の結果	103
4.6.2 各項目における結果	105
4.6.3 各項目の平均	107
4.7 まとめ	108
第5章 ほめの表現	110
5.1 日本語と韓国語におけるほめの表現	110
5.1.1 会話における「ほめ」の表現の特徴	110
5.1.2 「ほめ」の表現の分析結果	113
5.2 肯定的評価語のみ使用	115
5.2.1 日本語の肯定的評価語	116
5.2.2 韓国語の肯定的評価語	118
5.2.3 肯定的評価語の日韓対照	121
5.3 肯定的評価語の使用＋他の情報	122
5.3.1 「肯定的評価語の使用＋他の情報」のパターン	122
5.3.2 「肯定的評価語の使用＋他の情報」の日韓対照	127
5.4 肯定的評価語の不使用	128
5.4.1 「肯定的評価語の不使用」の表現方法	129
5.4.2 「肯定的評価語の不使用」の日韓対照	136
5.5 強意表現・緩和表現	137
5.5.1 強意表現	137
5.5.2 緩和表現	140
5.6 まとめ	144

第6章 ほめの対象	146
6.1 ほめの対象の分類.....	146
6.2 ほめの対象の分類結果.....	149
6.2.1 日本語.....	149
6.2.2 韓国語.....	150
6.2.3 日韓対照.....	151
6.3 ほめの対象ごとに見る表現	154
6.3.1 日本語.....	154
6.3.2 韓国語.....	157
6.3.3 日韓対照.....	160
6.4 まとめ.....	163
第7章 ほめに対する返答	165
7.1 ほめに対する返答の分類	165
7.1.1 肯定	167
7.1.2 回避	172
7.1.3 否定	179
7.1.4 複合の返答	182
7.2 ほめに対する返答の結果.....	188
7.2.1 日本語	189
7.2.2 韓国語.....	194
7.2.3 日韓対照.....	199
7.3 ほめの対象からみる返答.....	208
7.3.1 日本語.....	208
7.3.2 韓国語.....	209
7.3.3 日韓対照.....	211
7.4 まとめ.....	212
第8章 ほめの談話	215
8.1 「ほめの談話」の流れ.....	215
8.2 先行連鎖.....	217
8.2.1 先行連鎖の有無.....	219
8.2.2 先行連鎖のあるほめの談話.....	220
8.2.2.1 ほめ手主導の先行連鎖.....	221

8.2.2.2 受け手主導の先行連鎖.....	225
8.3 ほめの本連鎖.....	232
8.3.1 「ほめ－返答」のパターン.....	232
8.3.2 ほめの後に挿入発話のあるパターン	235
8.3.3 「ほめ－返答（ほめ返し）＝新たなほめ－返答」のパターン	236
8.4 後続連鎖	237
8.4.1 後続連鎖の主体.....	237
8.4.1.1 ほめ手主導の後続連鎖	238
8.4.1.2 受け手主導の後続連鎖	245
8.5 まとめ.....	252
第9章 まとめ	255
9.1 結論.....	255
9.2 ポライトネス理論からの考察.....	261
9.2.1 優先されるフェイス	261
9.2.2 日韓の「ほめ」のフェイス侵害度	262
9.2.3 日韓の「ほめ」場面におけるポライトネス・ストラテジー	264
9.3 示唆	266
9.3.1 日本語と韓国語のコミュニケーション理解への示唆	266
9.3.2 日韓異文化間コミュニケーションの相互理解への一助	267
9.3.3 日本語と韓国語の第二言語教育への応用	268
9.3.4 他の言語行動の分析への応用	269
9.4 課題	269
参考引用文献	272

資料集

日本語データ	29 頁
韓国語データ	35 頁
フォローアップ・アンケート	4 頁

第1章 研究の動機と目的

本研究は、日本語と韓国語の言語行動における共通点と相違点を明らかにするため、「ほめ」場面に注目し、談話レベルで分析を行ったものである。日本語と韓国語は、言語形式の面で類似していると言われているが、実際の言語使用の場面では様々な誤解や摩擦が起こっているようである。このような日本語と韓国語のコミュニケーションに対する理解に役立てるために行った実証的研究である。

日本語母語話者と韓国語母語話者が接して、コミュニケーションを行う時、言葉は通じて、その言語使用での違いによって相手の誤解や不快を招きかねない。相互がより円滑なコミュニケーションを行うためには、実際の言語使用と共に、そこに反映されている社会文化の価値や、相手への配慮の仕方を理解しなければならない。自分が今まで当たり前に関わっていたやり取り、そして期待していた一言が相手から現れなかったときに初めてその不自然さ、気まずさに気づくようになる。そこで、本研究では「ほめ」という言語行動に注目し、日本語と韓国語における「ほめ」に関する様々な側面を取り上げ、相互作用を含め、談話レベルで分析していくことにした。

会話における「ほめ」は、相手に関わる事柄に関して良いと認め、相手を心地よくさせることを前提に肯定的な評価を伝える言語行動である。このような「ほめ」をどのように行い、またそれに対してどのように反応し、さらに会話をどのように進めていくかについては、言語文化社会によって様々な異同が報告されてきている。しかし、日本語と韓国語を対象に「ほめ」の様々な側面を談話レベルで総合的に分析したものはなく、本研究が「ほめ」に関する日韓対照研究を行った所以である。

本研究の目的は以下の通りである。

条件統制した大学生同士の会話を収集、文字化したデータを用いて、ほめに用いられる表現、ほめられる具体的な対象、ほめに対する返答、さらにほめの談話の流れを分析し、日本語と韓国語の類似点と相違点を明らかにする。また、その結果をポライトネス理論に結び付け、考察する。

本稿の構成を簡略に記す。まず、1章では、研究の動機と目的、2章では、本研究の枠組みである、対照研究、談話研究、ポライトネス理論などの理論的な背景と先行研究、研究課題を明記している。3章では、本研究で用いる研究方法について述べ、4章～8章では、研究課題に沿った分析結果を述べている。分析内容は、基礎データ、ほめの表現、ほめの対象、ほめに対する返答、ほめの談話の五つである。9章では、本研究で得られた結果と、ポライトネス理論からの考察を行い、また示唆と今後の課題を述べている。

第2章 研究の背景

最初に、研究の枠組みである対照研究、談話研究、ポライトネス理論の概観を行った。次に、「ほめる」という言語行動の特徴を概観し、これまでの先行研究をまとめ、その成果と課題を踏まえた上で、本研究の具体的な研究課題を明記した。

まず、対照研究の二つの流れを概観した上で、日本語における対照研究の流れや日韓対照研究の概観を行った。日本での「対照研究」分野は、ヨーロッパの「対照言語学」とアメリカの「対照分析」とに影響を受けて発展してきたことが分かった。また、本稿では、複数の言語の言語体系や言語使用、さらにコミュニケーションに関連するさまざまな要素などを比較対照し、その対象とする諸言語の異同を明らかにする言語研究の一分野を「対照研究」と定めた。また、日韓対照研究において、近年、社会言語学、語用論、異文化コミュニケーションの観点から日本語母語話者と韓国語母語話者との言語行動、または談話行動に関する対照研究が行われ始めていることに注目し、その成果をまとめた。

次に、「談話」という用語について触れ、本稿で分析対象とする「談話」は、実際のコミュニケーションに参加する話者間の関係による（相互）行為としての言語行動、つまり「会話」を指すことにした。次に、これまで行われてきた談話研究の流れを、①ディスコース分析、②会話分析、③コミュニケーションの民族誌、④相互行為の社会言語学の四つのアプローチを中心に概観した。これらの談話研究は、いくつかの隣接学問分野が多様な関心と目的を持って、言語に対する共通の関心と学際的な研究を通して、不完全でありながらそれなりに確固たる目標を追求しているといえる。

また、ポライトネス理論については、ポライトネスの概念とこれまで発表されてきた主要なポライトネス理論を、Lakoff (1975)、Leech (1983)、Brown & Levinson (1987)、宇佐美 (2001)、Spencer-Oatey (2000)を中心に概観した。その中で、本稿では Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を分析結果を解釈するための基礎概念として用いている。

次に、先行研究でのほめの定義を吟味した上で、本稿での「ほめ」の定義を次のように定めた。

ほめ: 話し手が聞き手あるいは聞き手にかかわりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、直接的あるいは間接的に、肯定的な価値があると伝える言語行動である。

「ほめ」に関する研究は、1970年代後半から80年代後半にかけてアメリカの応用言語学者たちを中心に行われた「Compliment」に関する研究から始まった。英語圏では、Wolfson(1981a,1981b,1983)、Holmes(1986,1988)、Herbert (1990)などが「ほめ」関

連の研究を行った。主な分析内容は、ほめが現れやすい人間関係、出現頻度、表現形式、ほめの機能、男女差、評価対象、ほめに対する返答など多岐にわたる内容になっている。また、英語と他の言語との対照研究を行うことによって、文化による異なる言語使用を明らかにした研究も多数ある (Barnlund & Araki (1985)、Chen (1993)、Ylanne-McEwen (1993)、Lorenzo-Dus, N (2001))。

日本語では、熊取谷 (1989)、小玉 (1996)、山路(2004)が「ほめ」の機能について分析している。ほめの対象に関しては、調査対象や調査方法によって結果は異なっており、丸山 (1996) では、大学生を調査対象にし、所持物や外見はほめやすいのに対し、能力や性格はほめづらいと報告されている。また、シナリオを分析した大野(2001)によると、同等の親しい関係における「性格」、「作品」に対するほめがもっとも多い。書き言葉におけるほめを分析した古川(2003)は、目上から目下へのほめと親しい関係同士のほめが多いと報告し、また、対象としては「行動・態度」が多く用いられるという。次に、ほめに対する返答に関する研究 (寺尾 1996、平田 1999)によると、従来言われていたような否定の多用は見られず、回避が多いことが分かった。さらに、日本語では、ほめの談話構造について分析を試みたものとして、熊取谷(1989)、山根(1999)、大野(2002)などがある。

韓国語において、キム・ヒョンジョン (1996) によると、英語母語話者は形式化された直接的なほめを行う傾向が強く、韓国語母語話者は周縁的な言及だけを用いる傾向が強い。また、談話完成型テストを用いたキム・ヒョンミン (2003) によると、韓国の大学生は、成就 (能力、実力)、と性格をよくほめる。ほめに対する返答の結果は、分析データによって異なっている。談話完成型テストなどのアンケートを用いた研究はすべて「肯定(受け入れ)」が多いと報告しているが、自然な会話場面に起きるほめを書きとめた方法を用いたペク・キョンスク (1997) だけは「回避」が最も多いという。これは実際の言語使用と意識の違いから表れた結果ではないかと考えられる。

また、日本語と韓国語における「ほめ」に関しては、金庚芬(2001)、木内(2002)、キム・ヨンジュ (2002)、ソン・ヨンミ (2003) などがあり、数は少ないものの、表現や返答を中心に分析され、日韓の異同が少しずつ解明されつつある。

しかし、上記の多くの研究が持つ方法論的限界は、実際の言語使用、つまり会話のやり取りの中で行われる「ほめ」を見ていないことである。とりわけ、研究結果を日本語と韓国語の円滑なコミュニケーションの理解の一助にすることを目的とするならば、実際の会話の中でみられる「ほめ」に注目し、より長い談話レベルで分析する必要がある。また、分析内容においては、表現、返答、対象など「ほめ」の一面だけを分析しているものは多いが、各々の特徴を明らかにした上で、それらが相互にどのように関連しているかまで分析するといった「ほめ」の全体像に迫る試みはまだ行われていない。

第3章 研究方法

3章では、本研究で用いる研究方法について述べた。最初に、データの概要を述べ、次に会話を文字化する際の原則や、表記法について英語、日本語、韓国語別の先行研究をまとめた上で、本稿で用いる文字化の原則と表記や記号をまとめた。その後、本稿におけるデータの分析にかかわるコーディングと分析項目に関して述べた。

データ収集の際、会話録音に協力してくれる人々の様々な社会的属性をどのように条件統制させるかは非常に重要な事項である。本研究では会話協力者の言語（母語）、社会的地位（大学生）、性（同性）、親疎（親しい友人）という条件を統制することとした。

「ほめ」関連の先行研究によると、ほめる場面は、主に同等な社会的関係において現れ（Holmes 1988）、特に、知り合いや友達の間で一番頻繁に行われており（Wolfson 1983）、また、性別によってほめとその返答が異なる（Holmes 1988、Herbert 1990）。この結果を踏まえて、また、日本語と韓国語の比較が同じ条件の下でできるように、会話協力者の関係は、日韓共に、親しい同性の友人同士に統一することにした。

本研究で収集したデータは、日本語会話 30 組、韓国語会話 30 組の計 60 組の会話を録音したものである。会話協力者は、日韓、男女ともに 20 代の大学生、大学院生である。各会話は 20 分を目安とし、会話の内容は会話協力者に任せて、日常生活における雑談をしてもらった。ただ、日本語母語話者を対象として予備調査を行ったところ、「ほめ」があまり現れなかったため、本データを収集する際は、日韓ともに研究者が直接集めた協力者（以下、直接協力者）に友人をそれとなくほめてくれるよう頼むことにした。会話終了後は、会話のデータの妥当性と会話分析の結果の信頼性を裏付けるため、二次的データとして、フォローアップ・アンケートを行った。その内容は、年齢、性別、相手との関係などを聞くフェイスシートと、録音機を意識していたか、また自然な会話ができただかなどの感想などの構成になっている。

次に、収集したデータを文字化し、分析の資料に整える作業に関する先行研究を英語、日本語、韓国語の順に概観した。その後、本研究で用いる、文字化の原則をまとめた。日本語の表記は基本的に「改訂版：基本的な文字化の原則」（宇佐美 2003a）に従うが、本稿における修正表記法も示した。また韓国語の場合、表記は原則的に「（ハングルつづり法）1988 改訂」に従いつつ、韓国語の話し言葉特有の現象を表記する方法を提案できた。日本語と韓国語の会話の文字化は、それぞれの言語を専攻している日本語母語話者の大学院生の協力を得たものである。また、文字化した発話を数量化し、定量的分析ができるように、ほめに対する返答を分類項目別にコーディング（記号化）した。文字化における発話文の分割とコーディングの信頼性は、第一認定者（筆者）と第二認定者（Second Coder）の間の判定の一致率にて判断した。

第4章 基礎データ

4章では、本研究で用いる基礎データの結果を示した。本研究では、「ほめの談話」を中心に文字化した上で、その中の発話を数量化し、定量的分析ができるように、分析項目別にコーディングを行った。基礎データとして、文字化した日本語と韓国語の全発話文数、ほめの談話数、ほめと返答の数を示した。そして、男女別、協力者別、ほめの談話別の結果を明記した上で、各協力者の結果も示した。さらに、フォローアップ・アンケートにおける結果も示した。

分析の結果、本研究のデータにおける「ほめ・返答」の数は、日本語 172 回であるのに対し、韓国語 251 回で、韓国語のほうが日本語より多い。また、「ほめの談話」は日本語が 95 場面現れたのに対し、韓国語は 133 場面現れた。さらに、会話者一組の平均を見ると、日本語では、ほめの談話が 3.2 場面、ほめは 5.7 回である。それに対して、韓国語では、ほめの談話が 4.4 場面、ほめは 8.4 回である。したがって、本研究に協力した会話者においては、韓国語母語話者のほうが日本語母語話者より相手のことをより多くほめていることが明らかになった。

また、一つの「ほめの談話」をなす発話文数では、日本語では、約 13 文であるのに対し、韓国語では 9 文で、ほめ場面が始まると、日本語のほうが韓国語より長いやり取りを交わすことが分かった。

次に、直接協力者と会話相手における特徴を本研究での会話収集における設定と結び付け、検討する。本研究では直接協力者に事前に相手のことに関してほめてくれるよう指示を与えていた。「ほめ」が行われたのは、直接協力者からの場合が圧倒的に多いが、これはデータ収集での設定が影響していると考えられる。なお、日韓共に、指示を受けていない会話相手からのほめは約 1～2 割現れている。

話者二人の発話文数を見ると、日本語と韓国語とに違った傾向が見えた。それは、韓国語では話者二人の発話文数に 3 文以上の差が出ている組が十六組もあり、日本語の六組よりはるかに多いことである。つまり、韓国語では、話者 2 人が交互に会話を交わすのではなく、1 人がもう 1 人より多く発話するやり取りが多いと言える。これは、韓国語の会話のやり取りにおける特徴の一つであると考えられる。

最後に、男女差を見ると、日韓ともに「ほめの談話、発話文、ほめ・返答」の数は、すべて女性が男性より多いことが明らかになった。この結果は、英語圏での先行研究の結果とも類似している。より詳しく見ると、韓国語女性が最も多く、その次は韓国語男性、日本語女性の順で、日本語男性は最も少ない。

第5章 ほめの表現

5章では、ほめの表現を取り上げ、会話の中ではどのような表現を用いてほめが行われるかを分析した。ほめの表現を分析するに当たって、①肯定的評価語のみ使用、②肯定的評価語使用+他の情報、③肯定的評価語の不使用の三つに分け、それぞれの特徴を明らかにした。

まず、「肯定的評価語のみ使用」では、日本語と韓国語の「ほめ」に用いられる「肯定的評価語」の種類と頻度を分析し、その結果、日本語と韓国語では、共通して多くの場合「肯定的評価語」を用いることでほめを行っていることが明らかになった。しかし、日本語のほうが韓国語に比べて「肯定的評価語」の使用率が高く、韓国語は、使用率は日本語より低いものの、「肯定的評価語」の種類がより豊富に見られた。肯定的評価語として、「いい()」、「すごい()」、「格好いい()」が共通して多く使用されており、これらは両母語話者が共通して多用する肯定的評価語といえよう。また、「かわいい」と「(きれいだ)」は、日韓それぞれ、女性の外見に関する評価語として最も頻繁に用いられていた。

②「肯定的評価語+他の情報」と③「肯定的評価語の不使用」では、具体的なパターンや表現方法を分析し、会話に見られる様々なほめの表現を見ることができた。これらの表現は、韓国語のほうにより多く用いられていた。つまり、「肯定的評価語」の使用に、様々な情報を付け加えたり、あるいは評価語は使わず、自分の意見や根拠などを説明することでほめを行うのは韓国語に多いことが明らかになった。

このことから、日本語では相手のことに関してほめる際は直接的で評価的な表現を用いる傾向がより強いと言える。それに対して、韓国語では、評価語だけで表現するより、ほめに関連する具体的で説明的な表現が多い。つまり、日本語では、ほめを行う際その発話がほめであることをはっきり示す肯定的評価語を用いる傾向が韓国語より強い反面、なぜほめるのか、あるいはほめの具体的な根拠などへの言及や説明はあまり少ないと言える。一方、韓国語では、なぜ自分がほめるのか、どういうことに評価を与えるのかなど、自分の意見や感想を詳しく述べ相手に伝えようとする傾向が強い。

次に、ほめの表現における男女差を見ると、日本語の場合、女性は男性より肯定的評価語のみを使用する傾向がより強いのに対し、男性は肯定的評価語の使用に他の情報も付け加える表現を女性より多用している。また、男女ともに肯定的評価語を用いないほめはあまり行わない結果になっている。一方、韓国語では、肯定的評価語のみを使用するのに男女の差はなく、また、他の情報を加える表現は女性のほうにわずかながら多く見られている。肯定的評価語を用いない表現は、男性が女性より若干多い結果になっている。

第6章 ほめの対象

6章では、日本語と韓国語の会話協力者は具体的に何をほめているのかを分析した。まず、ほめの対象の分類について検討してから、日本語と韓国語における分析結果を示した。また、ほめの対象と表現との関連も分析し、日韓の類似点と相違点を明らかにした。

分類に当たって、一過性か継続性かと、先天的か後天的かという面を考慮に入れ、「所持物、外見、外見の変化、才能、遂行、性格、行動」の7つに分類した。

分析の結果、最も高い頻度で現れるほめの対象が、日本語と韓国語とで異なっていることが明らかになった。日本語では「遂行」、「行動」が最も高い頻度で現れているのに対して、韓国語では「外見の変化」、「外見」、「遂行」の順で出現頻度が高い。一方、類似点としては、「所持物」へのほめの割合が日韓ともに1割前後現れた点と、また、両言語共に「才能」や「性格」のほめが少ない点が挙げられる。この結果から、韓国の大学生社会では「外見(の変化)」や「遂行」に肯定的な価値を置いているのに対して、日本の大学生社会では「遂行」や「行動」に肯定的な価値を置いていると考えられる。

ほめの対象と表現との関連を見ると、「遂行」、「所持物」、「才能」、「外見の変化」に関するほめに用いられる表現は日本語と韓国語で類似した結果になっている。「遂行」では日韓ともに「評価語のみ使用(6割)：評価語+他の情報(2割)：評価語の不使用(2割)」の割合である。また、「所持物」と「才能」をほめる際は、日韓ともに評価語を9割以上用いており、「外見の変化」では7割以上評価語を使用している。一方、「外見」、「行動」、「性格」へのほめの表現には日韓の違いがはっきりと現れた。「外見」を見ると、日本語ではすべてが「評価語のみ使用」であるのに対し、韓国語では「評価語のみ使用」は約3割に過ぎず、「評価語の不使用」が4割を超えている。また、「行動」へのほめに、日本語では評価語を多用するのに対し、韓国語では評価語を使用しない場合が4割以上である。「性格」でも、日本語は「評価語のみ使用」が多く、韓国語では「評価語+他の情報」がより多く用いられている。したがって、これらの対象をほめる際の表現には、日本語と韓国語とに相違があると言える。

次に、ほめの対象における男女差を見ると、日韓共通して、女性のほうが「外見」、「外見の変化」、「所持物」を、男性のほうは「行動」、「性格」をより多くほめることも明らかになった。また「遂行」へのほめは、日本語男性・女性、韓国語男性がもっとも多くほめているのに対し、韓国語女性だけは「外見(の変化)」を頻繁にほめていた。

第7章 ほめに対する返答

7章では、日本語と韓国語のほめに対する返答を分析し、その類似点・相違点を明らかにした。また、ほめの対象と返答との関連も分析し、日本語と韓国語の類似点と相違点を明らかにした。

返答は、「肯定・回避・否定」と、それらが二つ以上続けて現れる「複合」の4つに分類した。

その結果、日本語も韓国語も「ほめ」に対する返答として、「回避」や、「複合」が多用されていることが明らかになった。すなわち、表現上、はっきりと肯定か否定かが分からない返答が用いられる、あるいは、二つ以上の肯定・回避・否定を用いるなど、より複雑な返答が使用されるのである。しかし、「回避」、「複合」の詳細を見ると、日韓間に相違点が現れている。両言語ともに「肯定的」回避が多いものの、「否定的」回避は日本語により多い。また、韓国語では、最初の返答を繰り返すか強調する「複合」が多い反面、日本語では最初の返答を否定方向へ変化させる「複合」が多用されるのである。次に、日本語には「否定」がより多く、韓国語に「肯定」がより多い。とりわけ、韓国語の「肯定」には「自慢」の返答が多用されているが、日本語では非常に少ない。

そして、日韓それぞれ、ほめの対象によってその返答が異なっている。まず、類似点として、「所持物」へのほめには「否定」の割合が非常に低く、「才能」へのほめには「否定」の割合が高いことが挙げられる。一方、相違点としては、「才能」、「外見」、「外見の変化」に関するほめに対して、日本語では「肯定」がまったく現れなかったのに対し、韓国語では1~2割現れている。ただし、韓国語でもほかの対象に比べると若干減少している。また、日本語では「所持物」を除く対象において「否定」が2~3割占めているのに対し、韓国語では「才能」、「遂行」を除く対象において「否定」は1割以下で非常に少ない。

また、ほめに対する返答における男女差として、まず、日韓ともに女性が男性より「複合」の返答を多用している点が挙げられる。ただし、日本語女性にはまったく現れなかった「肯定→肯定」の返答は、韓国語女性にもっとも多く見られた。また、男女の違いが見られたものの、その傾向は日本語と韓国語とで逆の結果になっているのがある。それは、日本語では女性に「肯定」が少ないのに対し、韓国語では女性に「肯定」が多い。また、日本語男性では、最初の返答を否定方向へ変化させる「複合」の使用が韓国語男性に比べ、倍以上多く見られた。

第8章 ほめの談話

8章では、会話者二人の会話の話題としてほめの対象が導入され、他の話題に移るまでのやり取りである「ほめの談話」を分析し、日本語と韓国語の異同を明らかにした。まず、「ほめの談話」を最初のほめを中心に「先行連鎖」-「本連鎖」-「後続連鎖」別に分け、連鎖の有無、主導する話者、用いられるストラテジーを中心に分析した。

まず、「ほめの談話」における先行連鎖は、韓国語より日本語のほうに多く見られ、日本語ではほめる前に、それに関連する話題を導入してからほめを行うことが分かった。それに対して、韓国語では「ほめの談話」がほめることから始まるなど、先行連鎖なしでほめが行われる傾向が日本語より強い。また、日本語では、相手から導入された話題を相手へのほめにつなげる傾向が多く見られた。一方、韓国語ではほめ手が意図を持って、自ら話題を導入する傾向がより強い。ここで、ほめを行うまでのプロセスに日韓の違いがはっきり現れた。また、先行連鎖に用いられるストラテジーとしては、ほめ手による「質問や確認」や、ほめの受け手による「情報提供」がもっとも多く見られた。

次に、本連鎖では、日本語と韓国語における「ほめ-返答」のパターンを実際の例とともに提示し、最も典型的なのは、一つの「ほめ」に対して、「肯定・回避・否定」の返答のうち一つが現れるやり取りであることが分かった。しかし、データからは、「肯定・回避・否定」が二つ以上現れる返答も多く、両母語話者ともより複雑な返答をしていることが分かった。

返答の後に、実質的発話から始まるやり取りである後続連鎖では、日本語と韓国語ともにほめ手が話題を維持しながら主導することが明らかになった。具体的なストラテジーとしては「再ほめ」がもっとも多く、両母語話者は相手を一度ほめると、再度ほめる傾向が強いといえる。また、ほめの受け手が直前のほめに対する返答を行ってから、さらにターンを取り後続連鎖を行う場合、日本語ではほめ関連の話題を維持する発話が多いが、韓国語では受け手が自ら話題を変えていく発話が日本語より多く見られ、日韓の違いが現れた。

以上のような「ほめの談話」における結果と本研究の基礎データとを関連付け、言及すべき点がある。基礎データで示したように、一つの「ほめの談話」における発話文数を見ると、日本語のほう韓国語より長いことが明らかになっている。なぜそのような違いが見られるのかについての答えがここにあるのである。つまり、ほめの談話において明らかになった日韓の違いである「先行連鎖の有無、ほめに対する返答の長さ、後続連鎖における話題展開の仕方の違い」によって、一つのほめ場面が始まると日本語のほう韓国語より長いやり取りが行われるのである。また、基礎データでは、一つの「ほめの談話」には平均2回のほめが行われるという結果になっているが、その詳細は、後続連鎖の分析結果に現れている。つまり、「最初のほめ-返答-（質問・確認-受け答え）-再ほめ-返答」の流れが多く見られるのである。

第9章 まとめ

第9章では、本研究で得られた結果を研究課題に沿ってまとめた上で、それらをポライトネス理論の観点から考察した。研究課題に対する分析結果は、上記の4章～8章にまとめられている。ここでは、本研究の結果をポライトネス理論に結び付け、考察した内容を中心にまとめる。

ポライトネス理論からの考察

相手とのやり取りの中で、好ましい対人関係を築くためには、相手への配慮がもっとも大切であることは、如何なる言語文化社会においても通じる普遍的な原則である。しかし、その配慮の示し方は各々の言語文化社会によって異なるようで、それは言語使用に反映されていると考えられる。ポライトネス理論は、そのような、相互作用のコミュニケーションを問題にしている重要な言語理論の一つである。ポライトネス理論では、人間は誰もがポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスとを持っていると説明されている。言語行動は多かれ少なかれ相手のフェイスを脅かす恐れがあるため、話し手は相手のフェイスを侵害しないようにさまざまな言語的戦略（ポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・ポライトネス）を取っている。

相手をほめるということは、互いの関係をよりよくし、より親密な関係にするために有効な言語行動であり、典型的なポジティブ・ポライトネスの一つである。それを表すために用いる表現を見ると、日本語では、ほめを行う際その発話がほめであることをはっきり示す肯定的評価語を用いる傾向が強い反面、なぜほめるのか、あるいはほめの具体的な根拠などについてはあまり説明しない。ほめをうまく行うことも大事だが、それによって相手のフェイスを脅かすようなことは避けたい、つまり、ほめ手本人のフェイスと相手のフェイスを一緒に守ろうとするほめ手の意図の表れだと解釈できる。一方、韓国語では、なぜ自分がほめるのか、どういうことに評価を与えるのかなど、詳しい自分の意見や感想を述べ相手に伝えようとする傾向が強い。つまり、ほめをうまく行いたいといった、ほめ手自身のフェイスが優先された表れだと思われる。このように、相手のことに関して肯定的な評価を伝える行動であっても、ほめ手と受け手のどちらのフェイスを優先、配慮するかにおいては、日本語と韓国語の間に違いがあることが明らかになった。

次に、ほめに対する返答において、日韓ともにほめられたら、「回避」や「複合」を多用することが明らかになった。「ほめ」をあからさまに受け入れると自慢に受け取られる恐れがあり、一方、「ほめ」という相手の好意を打ち消す返答をすればせっかくほめてくれた相手にとって失礼になる恐れがある。「回避」はこの両方の恐れを考慮した返答として機能していると解釈できる。また、「複合」のように、最初に肯定してから否定したり、あるいは否

定してから肯定したりするなど、より複雑な反応を見せることで、相手との対人関係をうまく調節していると思われる。

また、日本語とは違って、韓国語においては自慢の返答や肯定を繰り返す返答が多用されている。このような返答は、ほめ手である相手のフェイスを侵害する恐れがあるにもかかわらず、韓国語の親しい友人同士の会話に多く見られている。したがって、韓国語では、会話者の関係が同等である場合、相手のフェイスを優先する謙遜の返答を用いるより、相手から認められた自分のことを自ら評価するといった、自分のフェイスを優先する返答が多用されているといえよう。

次に、「ほめ」の数を見ると、日本語より韓国語のほうにより多く現れている。会話者同士の関係は、日韓ともに親しい同性・同学年の友人同士の大学生であるが、「ほめ」の頻度に差があることから日本語に比べ韓国語では「ほめ」が持つ相手への負担の度合いが低いことが分かった。また、日韓の差が非常に大きかった「外見」関連のほめを見ると、日本語において「外見(の変化)」へのほめの出現頻度が低いのは、そもそも「外見(の変化)」が会話の話題として取り上げられる頻度が韓国語に比べて少ないことが考えられる。すなわち、日本語では、他の対象に比べ「外見(の変化)」を話題にしてほめることは、相手に与える負担が大きい、言い換えれば、相手へのフェイス侵害度が高いと見積もられ、できるだけ触れないように配慮するのが日本語母語話者にとっての一種のネガティブ・ポライトネスになっている。これに対して、韓国語の場合、「外見(の変化)」に関心を表す話題が多く、またそれを積極的にほめるポジティブ・ポライトネスを優先している。さらに、どちらの言語においても「才能」や「性格」よりは「行動」や「遂行」へのほめが多い。「才能・性格」とは、人柄・素質のように、その人の属性である。一方、「遂行・行動」はその人の本質的な特徴ではないだけにほめの対象になりやすいのである。

日韓の「ほめ」場面におけるポライトネス・ストラテジーとして、強意表現と緩和表現が用いられることも分かった。肯定的評価語の前後にその度合いを強める強意表現はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと考えられる。それとは対照的に、ほめの発話の文末には緩和表現を伴うことで、自分のほめが相手に押し付けがましくならないようにしており、これはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと言えよう。また、ほめに対する返答におけるポライトネス・ストラテジーとして、はっきりと肯定や否定をするより回避や複合の返答を用いることがある。しかし、日本語では、否定的回避や否定がより多く、最初の返答を否定方向へ変化させる傾向が強いことからネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが相対的に多用されていると言える。それに対して、韓国語では、日本語に比べて、肯定的回避、肯定が多く、最初の肯定を繰り返す返答が多く、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが好まれる。

次に、先行連鎖、後続連鎖における日韓の違いを堀口（1997）の「会話のしくみ」の観

点から考察した。日本語では、ほめる側の話し手は、ほめられる側の聞き手がほめの場面に自然に入れるように先行連鎖という場作りをしてからほめを行ったり、あるいは聞き手から出された話題を聞き手へのほめにつなげたりしていることが分かる。また、ほめられた側が話し手になって、返答の後の発話を行う場合、聞き手（ほめ手）から出された話題を維持するストラテジーを多用しているのである。それに対して、韓国語における話し手は意図したほめの話題を自ら導入し、聞き手をほめるか、あるいは先行連鎖という場作りをせずに聞き手をほめることから始めるやり取りを多用している。また、ほめられた人が返答の後の後続連鎖を行う際、聞き手（ほめ手）から出されたほめの話題を話し手本人が変えようとする傾向が非常に強いのである。以上の結果から、日本語では、話し手がほめ手であれ受け手であれ、相互に相手（聞き手）のフェイスを優先するストラテジーが多用されるのに対し、韓国語ではほめ手と受け手いずれも自分（話し手）のフェイスを優先するストラテジーが多く使われることが分かる。以上の結果から、聞き手優先の日本語と話し手優先の韓国語の会話の特徴が垣間見えたといえよう。

以上のような「ほめの談話」における日韓の言語（談話）行動は、各々の言語文化社会における規範でもあり、もっとも自然な言語（談話）行動でもある。「ほめ」場面における日韓の基本状態が分かると、互いの言語文化社会においてもっとも自然で、かつ円滑な「ほめ」言語行動、談話行動への理解にもつながると考えられる。

示唆・課題

本研究で用いた比較文化的なデータによる研究結果や考察は、日韓のコミュニケーション理解への示唆を与えてくれると考える。日本語母語話者と韓国語母語話者が接して、コミュニケーションを行う時、言葉は通じて、その言語使用での違いによって相手の誤解や不快を招きかねない。相互がより円滑なコミュニケーションを行うためには、実際の言語使用と共に、そこに反映されている社会文化の価値や、相手への配慮の仕方を理解しなければならない。それゆえ、本研究は、日本語と韓国語のコミュニケーションの相互理解の一助になると考えられる。

本研究は「ほめ」場面を分析したものであるが、得られた結果と考察は、他の言語行動の分析にも応用できると思う。そのような地道な研究の積み重ねによって、より包括的な観点から日韓の言語行動、談話行動が理解できるようになると強く信ずる。

今後の課題として、まず話者の言語、社会的地位、地域、階級、性、年齢(世代)などの社会的属性を考慮した分析、また話者間の上下、親疎、利害関係による分析、さらに発話の状況や場面などによる、「ほめ」の分析が必要であろう。さらに、日本語母語話者と韓国語母語話者との接触場面における「ほめ」を取り上げ、実際の異文化間コミュニケーションを分析することも課題としたい。次は、データ収集・整備に関連する課題として、録画データ

を用いることや、より視覚的に読みやすい文字化方法を工夫すべきである。分析において、今回は会話中での「ほめ」に注目し、分析を行ったが、今後は会話そのものを取り上げ、そこに見られるやり取りでの特徴を分析することを課題とする。

参考引用文献

<日本語>

- 青山文啓 (2001) 「対照言語学とは何か」『国文学 解釈と教材の研究』46 学灯社
- 秋月高太郎 (2002) 「女性対象メディアにおける「ほめことば」」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』社会言語科学会
- 阿部圭子 (1998) 「談話研究におけるデータの活用について-ビジネス談話データの事例から」『日本語学』17 (11) 明治書院
- 安平鎬 (2005) 「文法・表現 (2) - 韓国語の視点から- 「シテイル」と 「hako iss-nun-ta」 「hay iss-nun-ta」をめぐって」『日本語学』24 (7) 明治書院
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』梅田博之監修 前田真彦訳 大修館書店
- 飯田仁 (1990) 「コンピュータ言語学における談話構造分析」『言語』19 (4) 大修館書店
- 李殷娥 (1995) 「透明な言語・不透明な言語：韓日の婉曲表現と挨拶表現をめぐって」『朝鮮学報』157 朝鮮学会
- 李吉鎔 (2001) 「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究-談話構造とスキーマを中心として」『阪大日本語研究』13 大阪大学大学院文学研究科
- 石綿敏雄・高田誠 (1990) 『対照言語学』東京：桜風社
- 石綿敏雄 (1996) 「日本語学と対照言語学：対照研究の意義」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 李善雅 (2001) 「議論の場におけるあいづち - 日本語母語話者と韓国人学習者の相違 - 」『日本語教育論集 世界の日本語教育』11 国際交流基金日本語国際センター
- 市川熹・堀内靖雄・土屋俊 (2000) 「日本語地図課題対話コーパス」『音声研究』4 (2) 日本音声学会
- 井出祥子・生田少子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12 (12) 大修館書店
- 井上逸兵 (1999) 『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』東京：南雲堂
- 李漢燮 (2005) 「最近の韓国における漢字事情」『日本語学』24 (7) 明治書院
- 任炫樹 (2004a) 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6 (2) 社会言語科学会
- 任炫樹 (2004b) 「日韓断り談話に見られる理由表現マーカー - ウチ・ソト・ヨソという観点から - 」『日本語科学』15 国立国語研究所
- 任栄哲 (1991) 「在日韓国人の名前の使い分け」『朝鮮学報』141 朝鮮学会
- 任栄哲 (1993) 『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』東京：くろしお出版
- 任栄哲・李先敏 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『日本語教育論集 世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター

- 任栄哲・井出里咲子 (2000) 「似ていて違う？ことばと文化の日韓比較」『言語』7-12月号
大修館書店
- 任栄哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラッ』東京：大修館書店
- 任栄哲 (2005) 「言語行動」『日本語学』24 (7) 明治書院
- 上原聡 (2004) 「日韓語対照研究による敬語の文法化に関する一考察」『対照言語学の新展開』
東京：ひつじ書房
- 元智恩^{ウォンジン} (2005) 「断りとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」 - ポライトネスの観点
から」『日本語科学』18 国立国語研究所
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析-言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』18 (10)
明治書院
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス - ポライトネスの談話理論構想」『第7回国立国
語研究所国際シンポジウム報告書 - 談話のポライトネス』国立国語研究所編 東京：
凡人社
- 宇佐美まゆみ (2003a) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for
Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための
基礎的研究』(研究代表者：宇佐美まゆみ) 平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤
研究 C (2) 研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ (2003b) 「異文化接触とポライトネス - ディスコース・ポライトネス理論の観
点から - 」『国語学』54 (3) 国語学会
- 宇佐美まゆみ監修 (2005) 「BTS による多言語話し言葉コーパス - 日本語会話」『21 世紀 COE
プログラム言語運用を基盤とする言語情報学拠点』東京：東京外国語大学
- 内田伸子 (1993) 「会話行動に見られる性差」『日本語学』12 (5) 臨時増刊号 明治書院
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1989) 『日本語大辞典』東京：講談社
- 梅田博之 (1990) 「朝鮮語と日本語の述語構造の枠組み」『日本語教育』72 日本語教育学会
- 遠藤織枝 (1988) 「話しことばと書きことば」『日本語学』7 (3) 明治書院
- 太田亨 (2002) 「対照研究と日本語教育のより良い関係を目指して - 日本語・ポルトガル
語 - 」『対照研究と日本語教育』東京：国立国語研究所
- 大滝敏夫 (1996) 「ほめことばの日独比較」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 大野敬代 (2001) 「人間関係からみた「ほめ方」とその工夫について」『2001 年度日本語教
育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 大野敬代 (2002) 「politeness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について」『早
稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』9 (2) 早稲田大学大学院教育学研究科
- 大野敬代 (2005) 「「ほめ」の意図と目上への応答について - シナリオ談話における待遇コミ
ュニケーションとしての調査から」『社会言語科学』7 (2) 社会言語科学会

- 沖裕子 (2001) 「談話の最小単位と文字化の方法」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』信州大学
- 荻野綱雄 (1989) 「対照社会言語学と日本語教育 - 日韓の敬語用法の対照研究を例にして」『日本語教育』69 日本語教育学会
- 奥津敬一郎 (1990) 「日本語教育のための対照研究」『日本語教育』72 日本語教育学会
- 奥山洋子 (2004) 『こんなに違う！韓国人と日本人の初対面の会話（ ）』 :
- 生越直樹 (1996) 「朝鮮語との対照」『日本語学』15 (7) 明治書院
- 生越直樹 (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方 - 結果状態形との関連を中心にして - 」『日本語と韓国語 (下)』東京：くろしお出版
- 生越直樹編 (2002) 『対照言語学』東京：東京大学出版会
- 生越直樹 (2005a) 「文法・表現 (1) - 日本語の視点から - 」『日本語学』24 (7) 明治書院
- 生越直樹 (2005b) 「対照研究と日本語教育」『新版日本語教育事典』東京：大修館書店
- 尾崎喜光 (2005a) 『日韓新時代における若者の国際コミュニケーションのあり方と意識に関する研究』(第1部：論文編、第2部：資料編) 科学研究費補助金研究基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書
- 尾崎喜光 (2005b) 「依頼行動と感謝行動から見た日韓の異同」『日本語学』24 (7) 明治書院
- 嚴廷美 (1997) 「日本と韓国の大学生の場面での Hedge 表現使用における男女差の比較 - 主に丁寧さ (politeness) の観点から」『ことば』18 現代日本語研究会
- 柏木明子 (1999) 「日本語話者のほめに対する返答の研究 - 10代後半から20代前半の女性を被験者として」東京外国語大学日本課程卒業論文
- 亀井孝 (1996) 『言語学大事典6 術語編』東京：三省堂
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996) 「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 川村よし子 (1991) 「日本語話者の言語行動の特性」『日本語学』5月号 明治書院
- 姜錫祐 (1995) 「日韓における軍隊敬語の実態」『待兼山論』29 大阪大学文学部
- 姜錫祐 (1998) 「待遇行動としての韓国語における人称表現」『日本語学』8 (17) 明治書院
- 菅野裕臣 (1990) 「朝鮮語と日本語」『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説 (下)』東京：明治書院
- 木内明美 (2001) 『ほめに対する反応の韓日対照考察』韓国啓明大学校大学院修士学位論文
- 金庚芬 (2001) 『ほめに対する返答の日本語と韓国語の対照研究』東京外国語大学大学院修士学位論文
- 金庚芬 (2002) 「「ほめに対する返答」の日韓対照研究」『大学院博士後期課程論叢：言語・地域文化研究』8 東京外国語大学大学院

- 金庚芬 (2003) 「韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS) の「試作版」作成への協力作業過程と、そこで考えたこと」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(研究代表者: 宇佐美まゆみ) 平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 研究成果報告書
- 金庚芬 (2004a) 「日・韓大学生の会話に見られる「ほめ」の表現」『日語日文学研究』51 韓国日語日文学会
- 金庚芬 (2004b) 「日本語の「ほめの談話」に関する一考察」『桜美林国際学論集 Magis』9 桜美林大学大学院
- 金庚芬 (2005) 「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124 日本語教育学会
- 金庚芬・李恩美・朴銀南 (2003 未発表) 「韓国語の会話の文字化についての一考察」
- 金志宣 (2000) 「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み - 韓・日対照会話分析」『日本語教育』105 日本語教育学会
- 金珍娥 (2002) 「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』183 朝鮮学会
- 金珍娥 (2006) 『日本語と韓国語の談話における文末の構造』東京外国語大学大学院博士学位論文
- 金秀芝 (1994) 「日・韓両言語における「話題の転換 marker」の対照研究 - 接続表現を中心に」『大阪大学日本学報』13 大阪大学文学部
- 木山幸子・関崎博紀・木林理恵・施信余・金庚芬 (2003) 「先行研究におけるトランスクリプト・システムの概観と「基本的な文字化の原則 (BTSJ)」の意義」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(研究代表者: 宇佐美まゆみ) 平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 研究成果報告書
- 熊谷智子 (1996) 「日本語学の対象と方法: 談話」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 熊谷智子 (2002) 「‘対照研究’と‘言語教育’をつなぐために」『対照研究と日本語教育』東京: 国立国語研究所
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話」『言語習得及び異文化適応の理論的、実践的研究 (2)』広島大学教育学部日本語教育学科
- 熊取谷哲夫 (1994) 「発話行為としての感謝」『日本語学』7月号 明治書院
- クロン, アラン (1996) 『入門エスノメソドロジー - 私たちはみな実践的社会学者である』東京: せりか書房
- 小池生夫編 (2003) 『応用言語学事典』東京: 研究社
- 小磯花絵 (1999) 「談話研究を支える会話コーパス - その作成と利用の仕方」『日本語学』18 (10) 明治書院

- 小磯花絵・土屋菜穂子・間淵洋子・斉藤美紀・籠宮隆之・菊池英明・前川喜久雄 (2001) 「『日本語話し言葉コーパス』における書き起こしの方法とその基準について」『日本語科学』9 国立国語研究所
- 国立国語研究所 (1982) 『方言談話資料 (6) - 鳥取・愛媛・宮崎・沖縄 - 』東京：国立国語研究所
- 国立国語研究所 (1984) 『言語行動における日独比較』東京：三省堂
- 国立国語研究所 (1994、1997、2000) 『日本語とスペイン語 1、2、3』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (1996、2000) 『日本語とポルトガル語 1、2』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (1997) 『日本語と朝鮮語 上、下』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (2000) 『マイペンライ - タイ人の言語行動を特徴づける言葉とその文化的背景についての考察 - その1、その2』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (2001) 『日本語とフランス語：音声と非言語行動』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (2002) 『対照研究と日本語教育』東京：くろしお出版
- 国立国語研究所 (2006) 『言語行動における「配慮」の諸相』東京：くろしお出版
- 小玉安恵 (1996) 「談話インタビューにおけるほめの機能 - 会話者の役割とほめの談話における位置という観点から - (1)」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 斎藤英敏・ベ-ケン真佐子 (2000) 「『誉めに対しての返答』再考」『2000 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 坂原茂 (1990) 「談話研究の現在と将来」『言語』19 (4) 大修館書店
- 佐々木倫子 (1996) 「日米対照：女性の座談 - 発話文の数量的分析を中心に - 」『国立国語研究所研究報告集』17 秀英出版
- 佐々木倫子 (1998) 「言語の対照研究と日本語教育」『日本語科学』3 国立国語研究所
- 佐藤滋・堀江薫・中村渉 (2004) 『対照言語学の新展開』東京：ひつじ書房
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析 - 勧誘のストラテジーの考察』東京：くろしお出版
- 沢木幹栄 (1984) 「方言録音資料の作成法」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2 - 方言研究法 - 』東京：国書刊行会
- 重光由加 (2005) 「何を心地よいと感じるか - 会話のスタイルと異文化間コミュニケーション」『異文化とコミュニケーション』東京：ひつじ書房
- 島岡丘 (1986) 「外国語教育のための対照研究」『応用言語学講座 2 外国語と日本語』東京：明治書院
- 杉戸清樹 (1992) 「言語行動」『社会言語学』東京：おうふう
- 杉戸清樹 (1994) 「録音を文字化する」『日本語学』13 (5) 明治書院

- 杉戸清樹 (1996) 「日本語学と対照言語学：言語行動の対照」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 杉藤美代子 (1991) 「談話分析・発話とポーズ」『日本語学』10 (10) 明治書院
- 高田誠 (1996) 「対照研究の方法」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編 (1998) 『人間科学研究法ハンドブック』京都：ナカニシヤ出版
- 高橋秀明 (1999) 「談話に関する研究案内-文献と資料」『日本語学』18 (10) 明治書院
- 田窪行則編 (1997) 『視点と言語行動』東京：くろしお出版
- 田中春美 (2003) 「9. 対照言語学」『応用言語学事典』研究社
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』東京：ひつじ書房
- 田辺洋二 (1996) 「ほめことばの日・英語比較」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 塚本秀樹 (1997) 「語彙的な語形成と統語的な語形成 - 日本語と朝鮮語の対照研究 - 」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と韓国語 (下)』東京：くろしお出版
- 塚本秀樹 (2004) 「文法体系における動詞連用形の位置づけ」『対照言語学の展開』東京：ひつじ書房
- 津田早苗 (1994) 『談話分析とコミュニケーション』東京：リーベル出版
- 寺尾留美 (1996) 「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』15 (4) 東京：明治書院
- 寺村秀夫 (1982) 「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 外国語との対照』10 東京：明治書院
- トラッドギル, P. 土田滋訳 (1975) 『言語と社会』東京：岩波書店
- 永瀬治郎 (1998) 「コミュニケーション研究とデータ収集」『日本語学 9月臨時増刊号 - 複雑化社会のコミュニケーション』明治書院
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について - 単位としてのmove と分析の観点」『日本語学』9 (11) 明治書院
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』東京：勁草書房
- 羅^{ナンヌク}聖淑 (1992) 「韓国と日本の言語行動の違い - 既婚女性の呼称を中心に」『日本語学』12 (11) 明治書院
- 鍋倉健悦 (1997) 『異文化間コミュニケーション入門』東京：丸善ライブラリー
- 南雲堂編 (1988) 『ロングマン応用言語学用語辞典』東京：南雲堂
- 西田ひろこ (2000) 『異文化間コミュニケーション入門』大阪：創元社
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』東京：大修館書店
- 日本語ジェンダー学会編 (2006) 『日本語とジェンダー』東京：ひつじ書房
- ネウストプニー, J. V. ・宮崎里司編 (2002) 『言語研究の方法』東京：くろしお出版
- 野間秀樹 (1997) 「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と韓国語 (下)』東京：くろしお出版

- 野間秀樹 (2005) 「韓国と日本の韓国語研究 - 現代韓国語の文法研究を中心に - 」『日本語学』
24 (7) 明治書院
- 野元菊雄 (1996) 「ほめるという言語行動」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 橋内武 (1999) 『ディスコース - 談話の織りなす世界』東京：くろしお出版
- 林四郎編 (1986) 『応用言語学講座 2 外国語と日本語』東京：明治書院
- 林伸一 (2002) 「「ほめる・ほめられる」教育 - ほめる対象、方向、範囲、内容、動機、効果
などの分類試案」『教育学研究紀要』48 (2) 中国四国教育学会
- 林伸一・二宮喜代子 (2004) 「「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度 - 女子学生のアンケート調査に見る心理言語学」『山口国文』27 山口大学人文学部国語国文学会
- 平田真美 (1999) 「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学生センター紀要』横浜国立大学
- 日向ノエミア (1996) 「ほめことばの日伯比較 - 感謝と誉め言葉」『日本語学』15 (4) 明治
書院
- 古川由里子 (2002) 「「ほめ」の種類 - 受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に」『日本語・
日本文化研究』12 大阪外国語大学日本語学科
- 古川由里子 (2003) 「書き言葉データにおける〈対象ほめ〉の特徴 - 対人関係から見た「ほ
め」の分析」『日本語教育』117 日本語教育学会
- 白同善^{ベトドン善} (1993) 「絶対敬語と相対敬語 - 日韓敬語法の比較」『日本語教育論集 世界の日本語
教育』3 国際交流基金日本語教育センター
- 彭国躍 (1989) 「「謙遜の原則」の適用に関する比較社会語用論的試み」『待兼山論叢』
大阪大学
- 許明子^{ホミョンジャ} (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』東京：ひつじ書房
- 細川英雄 (1996) 「言語文化の対照」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田素美・重光由加・大谷麻美・村田和代 (2006) 『ポライ
トネスと英語教育』東京：ひつじ書房
- 堀内靖雄・中野有紀子・小磯花絵・石崎雅人・鈴木浩之・岡田美智男・仲真紀子・土屋俊・
市川熹 (1999) 「日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴」『人工知能学会誌』14
(2) 人工知能学会
- 堀江薫 (1998) 「コミュニケーションにおける言語的・文化的要因-日韓対照言語学の観点か
ら」『日本語学』17 (11) 明治書院
- 堀江薫・近藤絵美・姜奉植・守屋哲治 (2004) 「関西方言の否定形式交替現象に関する認知
言語学的研究：韓国語との対照に基づいて」『対照言語学の新展開』東京：ひつじ書
房
- 堀江薫 (2005) 「欧米における日本語研究・韓国語研究 - 日韓言語学会 (Japanese/Korean
Linguistics Conference) を中心に - 」『日本語学』24 (7) 明治書院

- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 東京：くろしお出版
- 洪珉杓^{ホンミンビョク} (1992) 「日本人と韓国人の丁寧意識の比較」『計量国語学』18 (7) 計量国語学会
- 前川喜久雄 (1997) 「日韓対照音声学管見」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と韓国語 (下)』 東京：くろしお出版
- 前川喜久雄・籠宮隆之・小磯花絵・小椋秀樹・菊池英明 (2000) 「日本語話し言葉コーパスの設計」『音声研究』4 (2) 日本音声学会
- 牧野誠一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』 東京：アルク
- 松木啓子 (2003) 「3.2 ことばの民族誌」『応用言語学辞典』 研究社
- 丸山明代 (1996) 「男と女とほめ - 大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析 - 」『日本語学』15 (4) 明治書院
- 水川喜文 (2001) 「会話分析による録画記録の利用法 - トランスクリプト作成の方法論 - 」『北星女子短期大学紀要』37 北星女子短期大学
- 水谷信子 (1996) 「日本語学と対照言語学：言語生活の対照」『日本語学』15 (8) 明治書院
- 南不二男 (1980) 『講座言語第3巻 言語と行動』 東京：大修館書店
- 南不二男 (1987) 「談話行動論」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相 - 座談資料の分析』 東京：三省堂
- 宮地裕・甲斐暁朗・野村雅昭・荻野鋼男 (1997) 『ハンドブック論文・レポートの書き方』 東京：明治書院
- 宮崎里司・マリオット, ヘレン (2004) 『接触場面と日本語教育』 東京：明治書院
- メイナード, K・泉子 (1993) 『会話分析』 東京：くろしお出版
- メイナード, K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性』 東京：くろしお出版
- メイナード, K・泉子 (2004) 『談話言語学』 東京：くろしお出版
- 森住衛監修 (2002) 『言語文化教育学の可能性を求めて - 言語文化教育研究論集 - 』 東京：三省堂
- 茂呂雄二 (1997) 『対話と知 - 談話の認知科学入門』 東京：新曜社
- 茂呂雄二・小高京子 (1996) 「日本語談話研究の現状と展望」『国立国語研究所研究報告集』14 秀英出版
- 諸井克英・中村雅彦・和田実 (1999) 『親しさが伝わるコミュニケーション - 出会い・深まり・別れ』 東京：金子書房
- 山崎晶子 (1999) 「ジェンダーとディスコース」『言語』28 (1) 大修館書店
- 山路奈保子 (2004) 「日本語の談話における「ほめ」の機能」『比較社会文化研究』15 九州大学大学院比較社会文化研究科
- 山根しのぶ (1999) 『雑談における「ほめ」の分析—「ほめ」を含む談話の構造と「ほめ」の機能』 名古屋大学大学院修士学位論文

- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 東京：くろしお出版
- 柳慧政^{ユヘジョン} (2001) 「日本語話者と韓国人日本語学習者の依頼行動の比較研究 - ポライトネステラテジーの観点から」 『学芸日本語教育』 3 東京：学芸大学日本語教育研究会
- 横田淳子 (1985) 「ほめられたときの返答における母国語からの社会言語的転移」 『日本語教育』 58 日本語教育学会
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編 (1999) 『会話分析への招待』 京都：世界思想社
- 林宇萍^{リンフビン}・林伸一 (2005) 「「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度 (II)」 『山口国文』 28 山口大学人文学部国語国文学会
- レンケマ, ヤン著, 中村則之訳 (1998) 『伝わることば - 談話コミュニケーションの基礎知識』 関西大学出版部
- 渡辺吉鎔 (1985) 「会話分析からみる日韓コミュニケーション・ギャップ」 『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』 東京：慶応義塾大学

<韓国語>

- (1995) “ ” :
- (1999) “ ” :
 , “21”
 ” 1998 -2004
- ・ (2002) 「 」 「 (1)-
 」 :
- (1986) ‘ ’ “ ” 194 :
- 金英柱 (2002) “日韓 國語 ‘ ’ 對照 究 機能 表現形式
 中心 -”
- 金漢柱 (1997) “ ” 高麗大 學校 教育大 學院
 英語教育專攻 碩士學位論文
- (1996) “ ” :
- (2003) ‘ ’ “ ” 12
- (2002) ‘ ’ “ (1)-
 ” :

(1991) “ ” :

(2002) “ ” :

(1997) ‘ ’

“ ” 20, :

(2002) “ (1)- ”

:

(2005) “ (2)- ”

:

(2002) “ ”

申惠琛 (1993) ‘ — 3

’ “ ” :

(1994) “ ”

(1998) “[] ” :

(1996) “ - ‘ ’ - ”

• • (2001) 『 』

:

(2001) “ ” :

(1994) “ ” :

(1998) ‘EFL, ESL ’ “ ”

(1996) ‘ ’ “ ” 4-2

:

• (1997) ‘ — ’

“ ” 5-1 :

(2002) ‘ ’ “ (1)-

” :

(1998) ‘ — • •

’ “日本學報” :

(2002) “ ” :

<英語>

- Austin, J. L. (1962) *How to Things with Words*. Oxford University Press.
- Barnlund, D.C. & Araki, S. (1985) Intercultural Encounters: the Management of Compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16.
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986) Assessing Observer Agreement. *Observing Interaction: an Introduction to Sequential Analysis*. Cambridge University Press.
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Bloom, L. (1993) Transcription and coding for child language research: The parts are more than the whole. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness-Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Chafe, W. L. (1993) Prosodic and functional units of language. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Chen, R. (1993) Responding to Compliments: A Contrastive Study of Politeness Strategies between English and Chinese speakers. *Journal of Pragmatics*, 20(1).
- Coulthard, R. M. (1977) *An Introduction to Discourse Analysis*. London: Longman. (吉村昭市・貫井孝典・鎌田修訳 (1999) 『談話分析を学ぶ人のために』 京都: 世界思想社)
- Du Bois, J. W., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S., & Paolino, D. (1993) Outline of discourse transcription. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Edwards, J. A. (1993) Principles and contrasting systems of discourse transcription. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ehlich, K. (1993) HIAT: A transcription system for discourse data. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fraser, B. (1990) Perspective on Politeness. *Journal of Pragmatics*, 14(2).
- Goffman, E. (1961) *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*. The Bobbs-Merrill Company. (佐藤毅・折橋徹彦訳 (1985) 『出会い: 相互行為の社会学』 東京: 誠信書房)
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual Essays in Face-to-face Behavior*. ALDINE Publishing Company. (広瀬英彦・安江孝司訳 (1986) 『儀礼としての相互行為』 法

政大学出版局)

- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In Peter Cole and J.L. Morgan (eds.), *Speech Acts (Syntax and Semantics, Vol.3)*. Academic Press.
- Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies* Cambridge University Press. (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳 (2004) 『認知と相互行為の社会言語学 ディスコース・ストラテジー』東京：松柏社)
- Gumperz, J. & Berenz, N. (1993) Transcribing conversational exchanges. Edwards & Lampert eds. *Talking Data*. USA :Lawrence Erlbaum Associates.
- Hall, E. T. (1959) *The Silent language*. NewYork; Doubleday. (國弘正男・長井善見・斉藤美津子訳 (1966) 『沈黙のことば』東京：南雲堂)
- Halliday, M. A. K. & Hassan, R. (1985) *Language, Context, and Text: Aspect of Language in a Social-semiotic Perspective*. Deakin University. (筧壽夫訳 『機能文法のすすめ』東京：大修館書店)
- Henderson, A. (1996) Compliments, Compliment Responses, and Politeness in an Africa-American Community. *Sociolinguistic Variation*.
- Herbert, R. K. (1989) The Ethnography of English Compliments and Compliment Responses: a Contrastive Sketch. in W. Oleksy (ed.). *Contrastive Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Herbert, R. K. (1990) Sex-based Differences in Compliment Behavior. *Language in Society*, 19.
- Herbert, R. K. (1991) The Sociology of Compliment Work: an Ethnocontrastive Study of Polish and English Compliments. *Multilingua*, 10(4).
- Herbert, R. K. and Straight, H. S. (1989) Compliment-rejection versus Compliment-avoidance: Listener-based versus Speaker-based Pragmatic Strategies. *Language & Communication*, 9(1).
- Holmes, J. (1986) Compliments and Compliment Responses in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*, 28(4).
- Holmes, J. (1988) Paying Compliments: a Sex-preferential Politeness Strategy. *Journal of Pragmatics*, 12.
- Hymes, D. (1974) *Foundations in Sociolinguistics : An Ethnographic Approach*. University of Pennsylvania Press. (唐須教光訳 (1979) 『ことばの民族誌』東京：紀伊国屋書店)
- Johnson, D. M and Roen, D. H. (1992) Complimenting and Involvement in Peer Reviews: Gender Variation. *Language in Society*, 21.

- Kasper, G (1990) Linguistic Politeness : current research issues. *Journal of Pragmatics*, 14.
- Lakoff, R. (1975) *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.
- Leech, G.N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』 東京 : 紀伊国屋書店)
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子訳 (1990) 『英語語用論』 東京 : 研究社)
- Lorenzo-Dus, L (2001) Compliment Responses among British and Spanish University Students: a Contrastive Study. *Journal of Pragmatics*, 331.
- Manes, J. (1983) Compliment: a Mirror of Cultural Values. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*. Newbury House.
- Manes, J. & Wolfson, N. (1981) The Compliment Formula. *Conversational Routine: explorations in standardized communication situations and prepatterned speech*. In F. Coulmas. (Eds.) The Hague. Mouton.
- Mizutani, O. and N. Mizutani (1984) Nihongo Notes(6): Situational Japanese 1. *The Japan Times*. Tokyo.
- Mey, J. L. (1993) *Pragmatics*. Blackwell.
- Owen, M. (1990) Language as a Spoken Medium: Conversation and Interaction. In N. E. Collinge (Ed.), *An Encyclopaedia of Language*. London: Routledge.
- Pomerantz, A. (1978) Compliment Responses: Notes on the Co-operation of Multiple Constraints. *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (1994) *Approaches to Discourse*. Blackwell.
- Scollon, R. and Scollon, S. W. (1995) *Intercultural Communication: a Discourse Approach*. Oxford UK & Cambridge USA: Blackwell.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為 : 言語哲学への試論』 東京 : 勁草書房)
- Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shin, Hae Kyong (1990) A survey of sociolinguistic studies in Korea. *International Journal of the Sociology of Language* 82: Mouton Publisher.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis : The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*, Oxford : Oxford University. (南出康世・内田聖二訳 (1989) 『マイケル・スタブズ 談話分析』 東京 : 研究社)

- Spencer-Oatey, H. (2000) *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*. The Continuum Publishing Company. (浅羽亮一 監修 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳 (2004) 『異文化理解の語用論 - 理論と実践 - 』 研究社)
- Tannen, D. (1993) *Gender and Conversational Interaction*. Oxford University Press.
- Tannen, D. (1993) *Framing in Discourse*. Oxford University Press.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction: an Introduction to Pragmatics*. Longman. (浅羽亮一 監修 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 (1998) 『語用論入門』 研究社)
- Van Dijk, T. A (1985) Introduction: Discourse Analysis as a New Cross-Discipline. In T. Van Dijk (Ed.), *Handbook of Discourse Analysis*, Vol.1 New York: Academic Press.
- Wierzbicka, A. (1991) *Cross-cultural Pragmatics: the Semantics of Human Interaction*. Mouton de Gruyter.
- Wolfson, N. (1981a) Compliments in Cross-Cultural Perspective. *TESOL Quarterly*, 15(2).
- Wolfson, N. (1981b) Invitations, Compliments and the Competence of the Native Speaker. *International Journal of Psycholinguistics*, 24.
- Wolfson, N. (1983) An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and Language acquisition*.
- Wolfson, N. (1989) *Perspectives: Sociolinguistics and TESOL*. Newbury House.
- Wolfson, N. and Manes, J. (1981) The Compliment as a Social Strategy. *Papers in Linguistics*, 13.10.
- Ylanne-McEwen, V. (1993) Complimenting Behavior: a Cross-cultural Investigation. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 14.
- Yule, G. (1996) *Pragmatics*. Oxford : Oxford University Press.